

東京大学史料編纂所とのデータベースの連携

2005年2月に公開した木簡画像データベース「木簡字典」(<http://jiten.nabunken.go.jp>)は幸い多くの利用者を得ています。このたび、東京大学史料編纂所が公開しているくずし字のデータベース「電子くずし字字典」との連携を図ることになり、去る5月29日(金)、東京大学福武ホールにおいて、奈文研の田辺征夫所長と東京大学史料編纂所の加藤友康所長との間で連携に関する覚書を締結しました。

「木簡字典」は古代の出土文字資料の代表選手である木簡の文字、一方「電子くずし字字典データベース」は中世・近世の紙の文書のデータを中心とする文字の字典です。今回の連携は、共通の検索システムを設けて、両データベースの検索結果を同時に表示できるようにするものです。このシステムが実現すれば、古代から近世まで千年にわたる日本の文字の変遷を一覧できることになり、既に定評のある両データベースの利便性がさらに大きく向上します。現在、今秋の公開に向けて準備を進めていますので、是非新しい日本の文字の世界を訪ねてみてください。

奈文研と史料編纂所とは、薬師寺の古文書調査を共同でおこなってきた実績があります。今回のデータベースの連携は、考古学と日本史の研究拠点相互の連携として画期的なものです。こうした研究工具は、機関の財産であると同時に、国民の財産でもあります。それらの連携は研究機関に課せられた責務でもあります。今回の連携はその先駆的な事例として重要な歴史の1頁を飾ることになるでしょう。

(都城発掘調査部 渡辺 晃宏)



握手を交す加藤所長(左)と田辺所長(右)

現代の名勝、平城宮東院庭園

2009年7月23日、現代に息づく保護すべき優れた名勝地として、文化財保護法第109条の規定に基づき、平城宮東院庭園が名勝に指定されました。

平城第44次発掘調査で東院地区の南端に園池の遺構が発見されてから40年余り、また、発掘調査の成果に基づき、さまざまな検討を重ねて復原修復して公開を始めてから10年余り、平城宮跡の国営公園化の取組みや遷都1300年の節目とも相まって、単に奈良時代の宮城の遺構を極めて良好に遺す遺跡としてのみならず、現代に生きる文化遺産としての保護を広く考えるひとつの契機とするべきところです。

文化庁が公表している資料によると、平城宮東院庭園は、中国および朝鮮半島から伝わったと考えられる造庭技法を吸収し、9世紀以降の日本庭園に見る独自のデザインへと変化を遂げようとする過渡的な状況を表すものです。また、8世紀における日本古来の庭園文化と大陸伝来の庭園文化が融合していく過程と、その後の発展の過程を知る上で造園史上、極めて高い価値を持つ事例です。さらには、その独特のデザイン・構造・技法が細部にいたるまで見事に復原された庭園として芸術上・観賞上の価値は高い、と評価されています。

東院庭園の区域は、当然、特別史跡平城宮跡の指定地に含まれており、遺跡の内容や価値についてその情報提供がおこなわれてきましたが、この度、重ねて名勝平城宮東院庭園が指定されたことにより、さらに庭園としての積極的な活用を図って、現代における芸術上、観賞上の価値をもっと豊かに発揮させていくような工夫を重ねていく必要があります。

(文化遺産部 平澤 毅)



名勝平城宮東院庭園と宇奈多里の森(南東から)